



初心にかえって… 附属小学校長 塚田泰彦

4月より附属小学校長として大塚キャンパスに通いはじめました。ここ3年は、大学・附属連携委員会委員として附属学校の事情をいくらか見聞する機会もあり、またこの1年半、教育研究科が推進した「教員養成GP」の実施などを契機に、大学との連携が深まりつつあることも実感しました。同時に、伝統と個性ある附属学校の底力を日に日に強く感じるようになりました。こうしたこともあって、校長職につくことの責任の重さを感じましたが、「先導的な教育研究拠点」で、個性豊かで力のある先生方とご一緒できることの幸運を思い、引き受けることにいたしました。

18歳で東京教育大学に入学した頃は、大学紛争の嵐も過ぎ去ろうとするときで、大塚キャンパスは白茶けたグラウンドとブロックを転がしたようなE館とW館が目につくだけでしたが、今ではすっかり豊かな「教育の森」となりました。初心にかえって学ぶつもりでおります。

どうぞよろしくお願いいたします。



まっすぐな視線で 附属中学校長 藤堂良明

このたび、附属中学校長として着任いたしました。かつて、私は教育実習を附属中学校でさせて頂いたこともあり、懐かしさとともに身の引き締まる思いがいたします。中学校に勤務しますと（といっても週二日ですが）、目新しいことばかりで、とても新鮮に感じられます。まず、先生方がまっすぐ中学生と向き合い、教科教育だけでなく課外活動も含めて、大変「熱く」生徒と関わっています。また、生徒たちも素直で目が輝き、自主的に活動しています。特に附属中学校では、宿泊を伴う海浜生活や高原生活などの校外行事があり、岩槻の人形工房での実習や長滞での地学巡検などの体験学習も設けられ、先生と生徒は深い関係にあります。中学時代は、心も身体も知能も最も発達し、将来の基礎となる時といわれています。生徒の身体と心の調和的発達を図り、将来の真のリーダー育成を目指していきたいと思っております。どうぞ宜しくお願いします。



附属高校に着任して 附属高等学校長 新井邦二郎

着任して、約1か月が過ぎようとしている。附属高校の一日の流れは、大学のそれとくらべ大差はなく、キャンパスでの生徒の姿も大学生のように伸びやかなものに映る。

生徒の姿をみつめながら、自分の高校時代のことを想い出す。埼玉県山形部で成長した私は高校生のとき、海の見える学校で教師になることを夢みていた。また親友と計3人でいつも近くの山に登り、お互いの将来をあきることなく語りあったことなど。当時乏しい知識と経験しかなかったが、つ

ありがとう

ねに将来に目を向けていた高校生活であった。

どの年代も大切であるが、とりわけ高校時代は自分の人生の方向性を自分の力で作りあげていく重要な時期であり、また多感な時期でもある。生徒の一人ひとりが自分の将来に希望を抱き、その実現のための営為を楽しく重ねていくことができるように、微力ながら校長として見守っていきたい。



37年ぶりの「里帰り」 附属騎場中・高等学校長 星野貴行

私は高校の3年間を教駒で過ごし、1971年に卒業しました。このたび、37年ぶりに母校に校長として戻ってくるようになりました。卒業生が校長に就くのは初めてとのことで、若葉会（本校のOB会）が少々騒がしくなっているようでもあり、プレッシャーも感じております。

赴任してまだ一月足らずですが、本校の教育方針はもとより、生徒たちの気質や雰囲気なども、私が在学しておりました40年前と基本的に変わっていないと感じております。職員会議の雰囲気も、「騎場の自由空間」にふさわしいもので、これらすべてが心地よく感じられています。「里帰り」する機会を与えられたことに感謝しております。

騎場の伝統は現場の教職員の方々の熱意と努力によって築き上げられてきたものであり、OBの一人として、これからも継承していくべきものと考えております。同時に、法人化後の新しい時代にふさわしい附属騎場のあり方、そしてさらなる発展を、気負い過ぎることなく模索していきたいと考えております。



気持ち新たに 附属視覚特別支援学校長 引田秋生

この4月に山梨県立盲学校長から異動してまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。

今年の入学式の新入生代表は沖縄出身の高等部普通科の女生徒でした。将来は教員になりたいと抱負を語り、素晴らしい挨拶をしていました。沖縄から本校普通科への入学は20年ぶりということで地元の沖縄タイムスのニュースにもなっていました。視覚障害を持つ生徒が日本全国から集まってきて、励まし合って、明るく元気に勉学に勤しむ姿を見ると、彼らのために全力で取り組まなければ、と気持ちを新たにしています。

また、校長室に掲げてある、本校の創立者である中村正直をはじめとする楽善会会友、校長の小西信八、町田則文、校長事務取扱石川倉次等、錚々たる先人の写真を見るたびに身の引き締まる思いがしております。

幸い、全国に誇れる優秀な教職員が大勢おりますので、一緒に力を合わせ、国内はもとより東アジアの盲学校のモデルとなるべく、本校の使命を果たしたいと考えております。

ありがとう



教育の質の向上をめざして 附属学校教育局次長 廣瀬雅哉

筑波大学の各附属学校は、我が国の初等中等教育や特別支援教育において重要な役割を果たしてきました。

各附属学校においては、カリキュラムの研究開発、先進的な実験授業の実施、中高一貫教育や総合学科の先導的な取り組み、特別支援教育の各分野の発展への貢献など、大きな成果をあげました。小学校生活科の新設や総合的な学習の時間の創設などにおける学習指導要領の改訂の際には、附属学校の実践が参考にされたことを私も記憶しています。

最近の中央教育審議会答申では、今後の目指すべき教育の姿として、自立して社会で生きていく基礎を育てること、社会を支え発展させるとともに国際社会をリードする人材を育てることを目標として掲げています。このためには、教育の質の向上が最も重要であると考えられます。

全国の教育をリードしていく筑波大学附属学校は、教育の質の向上のための教育研究成果を期待されています。各附属学

校の授業改善や研究開発などの取り組みを支援し、附属学校教育局は精一杯努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



日々精進 附属学校教育局準研究員 石川満佐育

このたび、附属学校教育局準研究員として着任いたしました石川満佐育です。

昨年度まで筑波大学人間総合科学研究科の大学院生として、研究、臨床を学んでまいりました。大学時代から数え8年間過ごしたつくば、学生生活を離れ、伝統ある附属学校を支える立場の人間となり、改めてその責任を感じています。

附属学校関連の私の仕事は、①教育相談、②児童・生徒への対応について附属学校教員との協議、③附属学校の委員会への協力、④プロジェクト研究「心理学の授業」の企画および実施、の4つになります。

附属学校に関わる指導教員の先生方と共に、附属学校の発展に貢献できますよう、日々務めたいと考えております。

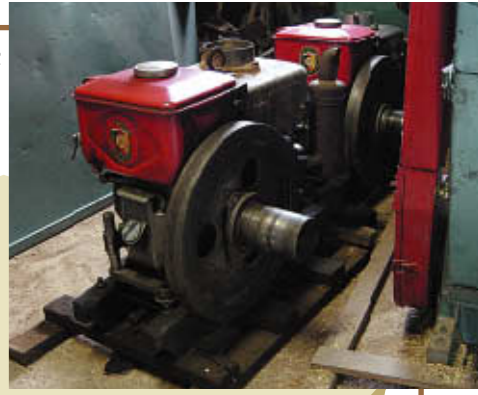
どうぞよろしくお願いいたします。

温故知新

騎場農学校とネットオークションと

附属騎場高等学校 市川道和

写真2



60年前の開校以来、史蹟でもあるケルネル水田にて続けられている稲作は、内外に広く知られているところである。「騎場水田の誌（昭和62年本校刊）」の中で、OBでもある内藤正典氏（一橋大学大学院社会学研究科教授）が以下のような一文を紹介している。

明治十一年一月二十四日、八時半に飯皇居を出発した明治天皇の一行は、岩倉右大臣、徳大寺宮内卿ら、政府重臣らを従えて騎場農学校へ向かった。農学校では内務卿大久保利通、勤農局長、そして校長らが一行を出迎え、陸海軍楽隊の演奏の中、玉座に着き、程なく式が始められた。大久保内務卿から学校の鍵が奉呈された後、勅語があり、内務卿祝辞、外国教師総代、ドクトル、ジョン・アダム・マックブライドの祝辞が続いた。（東京日日新聞）

写真1 金属製の水田碑

騎場農学校開校の式典を今に伝える記録であり、新入生オリエンテーションで紹介する度に生徒の関心を引くものである。この翌年から水田開墾が開始されたらしく、名称の由来になったドイツ人教師オスカー・ケルネルは、明治13年から14年頃に着任している。「騎場水田の誌」が発刊される10年前（昭和52年）に、東京教育大学は水田の入り口近くに金属製の碑を設置した（写真1）。水田の略歴と今後も引き継ぐ決意が記された碑は、水田の誌刊行と前後し、騎場野公園内に本格的な石碑（水田の碑）が建立されたのを機に撤去され、以来本校内に保管されている。



写真1

着任した時点（平成2年）で既に10年程度使用され、そもそも中古品を手に入れているので、恐らく昭和40年代製造で40年ほど経過していると思われる。毎年11月頃に、丸1日かかって400kg前後の籾を脱穀する作業を、写真右手前の脱穀機と共に長年担ってきた。昨年度の脱穀作業中、途中から発動機の出力が低下し始め、まだ半分の作業を残してついに始動できなくなってしまった。止む無く脱穀作業を中断し、翌1日を費やして発動機の分解整備を試みた。オイル交換、エアフィルター清掃、燃料流路清掃、燃料ポンプ調整と進め、幾重にもこびり付いた油泥をこそぎ落とした結果、ダークグレー色の精悍な表情を取り戻した。しかし、再組み立て後に1度だけ始動に成功したのが最期であった。ピストンに装着されるリングの劣化が原因らしく、部品が入手できない以上、完全に製品寿命が尽きたと言わざるを得ない。

写真2 脱穀機用発動機

写真奥に同型の発動機が並んで写っている。この緊急事態に及び、代替策に手を尽くした挙句辿り着いたのがインターネットオークションであった。同発動機は、ヤママー社が開発・販売した当時の売れ筋製品で、全国の農家に購入され最近まで動き続けてきたらしい。「NT65K」で検索すると今でも30～40件の情報が見つかり、そのほとんどがオークションへの出品である。農家での役目を終えた中古品を、わずか2万円ほどで入手（落札）できた結果、これからは歴史的水田において自前の稲作を続けていけることになった。

農学校開校の頃、金属製碑の頃、脱穀用発動機の経緯から、本校での温故知新に思いを巡らせてみた。